

## 2024年12月8日降臨節第2主日説教

バルク書5章1-9節

フィリピの信徒への手紙一1章1-11節

ルカ福音書3章1-6節

アドベントキャンドルも二本目となりました。二本目の意味は平和（諸説あります）です。本日の聖書日課のバルク書と詩編の代わりに唱えるザカリアの預言（ルカ1:38-79）には、「平和」という言葉がありますが、使徒書と福音書にはありません。ただし、使徒書のフィリピ書1章11節には「イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神を崇め、賛美することができますように」とあります。またバルク書には、「神からの義の外套」（5:2）、「（エルサレムは）神からのとこしえに、『義の平和、神を敬う栄光』と名付けられる」（5:4）、「神は、ご自分の慈しみと義を伴い」（5:9）と「義」という言葉が三回出てきます。これらは、まことの「平和」が、『聖書』の主なる神様と関係があること、ことに主なる神様の義と関係があることを示しています。

「平和」も「(正)義」も大切な事柄です。しかし、人間が望む義も平和も、人間が作り上げる正義も平和も、相対的です。自己の義や平和が絶対であると考えるとき、人間同士の争いが生まれるのでしょうか。主なる神様が示す義と平和こそ、まことのものです。そしてそれをわたしたちは、『聖書』から示されます。

『聖書』が、まことの義と平和を示すといいますが、『聖書』は、これですと、明確に示してくれるわけではありません。また、『聖書』を専門的に学び、その学びを徹底した人のみが、それを知ることでもありません。教会の礼拝に集められ、誰かのことを思いながら共に祈り、心を新たにすして『聖書』のことに耳を傾けた時、示されるのだと思います。そして、その礼拝も、限られた人だけではなく、できる限り様々な人とともに捧げることが大切なのだと思います。クリスマスを迎えるこの時期は、いつもと違う礼拝を持ちます。いつも教会に集められているわたしたちも、この時期、心を新たにすして『聖書』の言葉に、耳を傾けたいと思います。

さて、本日の旧約日課は、バルク書です。これは旧約39巻の中にはない文書、旧約続編です。聖公会では、ローマ・カトリック、正教会の伝統に準じて、礼拝でも読む伝統がありましたが、ユダヤ教とプロテスタント教会は『聖書』には含まれません。バルクという人物は、預言者エレミヤの書記であり、バビロン捕囚の際に活動した人です（紀元前6世紀ごろ）。バルク書の内容も、ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚という歴史的出来事について考察しながら、エルサレムという都市を題材として、イスラエルが神に立ち返ることの大切さを訴えています。しかし、内容的には、知恵文学的な要素も多くありますので、紀元前2世紀ごろ書かれた文書と考えられます。神の民のイスラエルの滅びの出来事に、何を見出すのか、言い換えれば、何が足りなかったのか、それは、知恵である。そう結論付けているのです。

ただし、バルク書は、漠然と知恵が大切だと主張しているわけではありません。4章1節に「**知恵は神の掟の書、永遠に続く律法である。これを堅く保つ者は皆、命に至り、これを捨てる者は死に至る。**」とある通り、それは「律法」と深く関係しています。ただし、「律法」の前に「神の掟の書」という表現があります。バル

ク書としては、「律法」を強調していますが、その前提として、全体としての『聖書』があることがわかります。もちろん、バルク書が書かれた時代、今日のわたしたちと同じような意味で、『聖書』が存在したわけではありません。しかし、主なる神様は、神の掟の『(聖なる) 書』を人間に授け、その中で最も大切な部分が「律法」であると主張しているのです。その意味では、今日のわたしたちが、『聖書』を大切にしようとするのと、意図は同じです。

さて、本日の福音書には、「義」という言葉も、「平和」という言葉もありません。1節から2節は、歴史的な事柄を書いています。西暦などが誕生する前の歴史の示し方です。そこから洗礼者ヨハネの出来事いつであったのかを示しています(ローマ皇帝ティベリウスの治世は、紀元14年から37年です)。イエス様に関する事柄を、一般的な歴史的出来事と結びつけて記述しようとするのが、ルカ福音書の特徴ですので、ここではまさにそのことが現れています。ただし、本日注目すべき事柄は、そのように描きながらも、洗礼者ヨハネの出来事を、「これは、預言者イザヤの言葉の書に書いてあるとおりでである」(ルカ3:4)と『聖書』と結びつけて考えていることです。もちろん、イザヤ書が、500年先の未来を予言していた、ということではありません。今の出来事から考えた時、イザヤ書の意味が分かったということです。

ここで引用されている箇所は、イザヤ書40章3~5節です。ただし、ヘブライ語の『聖書』(今日のわたしたちの旧約部分)からではなく、そのギリシア語訳(いわゆる七十人訳)からの引用です。それゆえに最後の部分「人は皆、神の救いを見る」が、現在の『聖書(旧約)』のイザヤ書「こうして主の栄光が現れ、すべての肉なる者は共に見る」(イザヤ40:5)とは異なっています。ただし、引用されたイザヤ書は、原文に直訳に近く訳せば、「すべての肉は、神の救いを見る(未来)」となります。「肉」という言葉は共通しています。「肉(なるもの)」とは、「霊(なるもの)」と対照的に、命とそれが宿るからだを与えられた存在を意味します。それゆえ、日本語の「聖書」は、そのような存在の代表として、その肉を「人」と訳しています。「人は皆、神の救いを見る」も素敵な訳ですが、イザヤ書のヘブライ語が元来「肉」であり、そこからギリシア語訳も「肉」としていたことを考えると、「人」ではなく、「肉なるもの」というような訳の方がよいように思えます。つまり、人間だけではなく、すべての主なる神様によって、造られた存在です。拡大解釈するならば、すべての被造物です。そして、そこに洗礼者ヨハネが出現した意味を、イザヤ書の言葉に見出した大切な事柄があると思います。

洗礼者ヨハネが始め、指示した出来事、すなわちイエス様の出来事とは、すべて肉なる存在つまり主なる神様が作られた全てが、主なる神様を見るようになる事柄であるということです。それは、言い換えれば、主なる神様を示す事柄だということです。主なる神様を示すとは、その愛を示すことと同じです。この世界にどれほど悲しいことがあっても、この世界が主なる神様の創造された世界であるからこそ、イエス様のことが語られる限り、その愛は示されるのです。そして、その愛を示す務めを果たす代表の一つが教会なのです。今年も、イエス様の誕生を祝うこの時期に、様々な礼拝を持ちます。また本日は、礼拝後にクリスマスコンサートも持ちます。主なる神様の愛を示す教会の一つとして、今年も様々な礼拝に励みたいと思います。